

### 37 発達障害者地域支援推進事業における困難事例の協働から見てきたこと

企画・情報部 発達障害情報・支援センター 加藤 潔 林克也 畠山和也 与那城郁子  
西山秀樹 飯村怜奈 進藤玲子 矢野美穂 水村真帆 西牧謙吾

【はじめに】 2018年度にスタートした発達障害者地域支援推進事業には、大きく二つの柱がある。ひとつは、困難事例について一緒に協働するための訪問（好事例の収集を含む）であり、もうひとつは、困難事例に立ち向かうための支援ノウハウや国研修等の知見を学ぶための研修企画（実地研修やブロック研修）である。2018年度において、私が協働参画できた困難事例は、発達障害者地域支援マネージャーや発達障害者支援センターの方々が地域や支援チームのリーダーとして誠実な取り組みをされてきたものばかりであり、困難事例に対し、二次的・三次的にかかわっていく際にどのような視点を持って臨めばいいか、多くの示唆をいただくことができた。

#### 【2018年度の困難事例協働に関する数値】

表1 困難事例の内容を年齢層から見た場合

	家庭内暴力	不登校・ひきこもり	強度行動障害	触法（リスク高）	就労	ストーカー行為	躁うつ	家族支援	計
4～6歳								1	1
7～12歳（小学生）	1		2						3
13～15歳（中学生）	1	2						1	4
16～18歳（高校生）	2		1						3
19～20歳代		2	4	1		1			8
30歳代		2	5	1	2		1		11
合計	4	6	12	2	2	1	1	2	30

【困難事例への対応のヒントを探る】 2018年度にかかわることが多かった、強度行動障害、不登校・ひきこもり、家庭内暴力の3つを取り上げ、全部で10の事例を選び、それぞれの事例ごとに、二次的・三次的にかかわる立場からの視点で対応のヒントをまとめた。なお、個人の事例に関することが記載されているため、この稿での紹介は差し控えさせていただく。

ここでまとめた視点は、地域における発達障害児者に対しての支援体制を構築していくというミッションを「マクロ的な視点」とすると、個々の困難事例に対してアプローチしていく「ミクロ的な視点」と言うことができるだろう。ミクロ的な視点ではあっても、その事例に取り組む中で、支援者同士の強固なつながりができたり、地域の中核を担えるような支援機関が育ったりすることで、地域における支援体制が確実に整っていくひとつのルートになるという手応えを感じている。

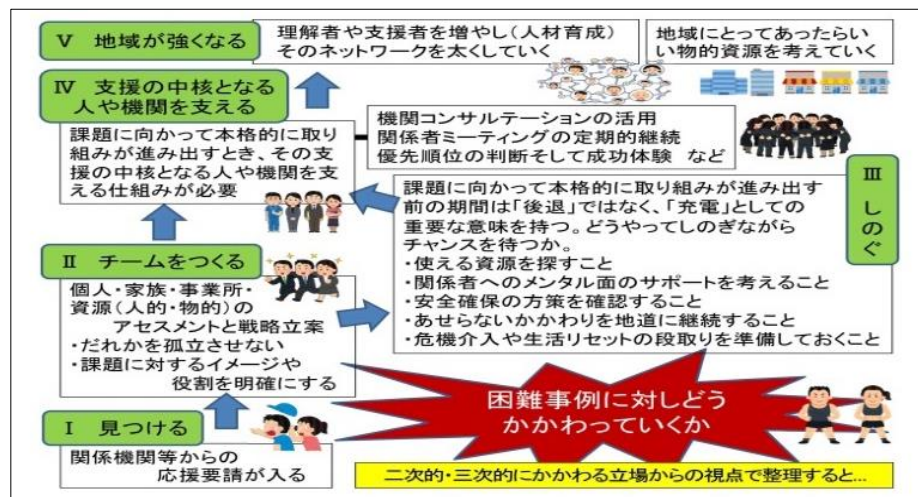


図2 困難事例への対応～ミクロからマクロへ